

## CHIT CHAT RADIO 子育てCHAT ROOM

2021年1月18日15時16分～15時41分



子どもとお金〜小遣いから学ばせる大事な生活スキル〜

― 今年初の登場ですね。どうぞ今年もよろしく願っています。

よろしく願っています。

― 前は鈴木先生のアメリカ、ブラジル、中国での出産、子育てのご経験についてお聞きしました。とても驚きでしたよね。人生そのものがアドベンチャーって感じですね。

確かに(笑)。

― いろいろな子育てアドバイスも、あれだけの人生を歩まれているんだからということ、私たちも納得しましたよね。(笑)

今回はですね、「子どもとお金」について鈴木先生に教えていただきます。お金という月々のお小遣いやご褒美としてのお小遣いが思いつくのですが、そういった小遣いのあげ方、使い方、お金の付き合い方についてお話しいただきたいと思います。まずはお金の付き合い方は親からもらうお小遣いから始まりますよね？

そうですね。お金の教育は、日本ではほとんどされてませんよね。アメリカでしたら、投資の仕方など小学生の頃から勉強する機会があるそうですね。日本は学校で学ぶ機会もないですし、家でもらうお小遣いの使い方はそれぞれの家庭に任されていますよね。

― はい。そう考えるとこれからワールドワイド、国同士の境がなくなっていく中で、日本のお金の扱い方がずいぶん差がつきますよね。

そうですね。日本人は貯金志向で、投資などでお金を増やすことに抵抗がありますよね。

― 確かにそうですね。なかなかそれを親から子どもに伝えるっていうのは難しいように思いますが、お金に関してどんなふうに子どもに教えるべきなのがいいんでしょうか？

私が以前した調査では、小学生の半分ぐらいはお小遣いをもらっていないで驚きました。欲しいものを必要な時に親が買ってあげるのだそうですね。他の調査では、小遣いをあげるタイミングが多いのは、小学校や中学校に上がった時だそうです。それでも高校生入られて大体四割は小遣いを定期的にもらっていないんだそうですね。

― 四割も？驚きますね。

そうなんです。必要な時、ほしい時に買ってもらう形だと、子どもはねだりますよね。希望が叶うまで際限なく粘る。

―確かに。

大人になった時に買いたい物を買う習慣がついていると、現金がなければクレジットカード、一括払いができればリボ払いにしています。限られたお金の中でどうやりくりするかを学ぶ機会がないまま大人になると、お金の使い方が大きく失敗することがあるのではないかと思いますね。

―例えば進学などで一人暮らしを始めた時に親がカードを渡して、それで大変なことになってしまう学生さんがいるそうですね。それこそ際限なく使ってしまったって、自分のアルバイト代では返せないくらいの借金したり。やっぱり、小さい頃からの教育が影響しますよね。

限られた中でどうするかを学ぶことは、我慢することや物の値段、計画性を身につけることにつながりますよね。ですから、私は小遣いをあげるべきだと思います。うちは小学一年からあげてました。

―はい、小さい頃からお遣いを与えるのが妥当なんじゃないですか。

それは家庭によると思いますが、小学生だと五百円から千円くらいが多いみたいですね。また、子どもの学年に百円をかけた額にするというのも聞いたことがあります。中学生になったら三千円、多くて五千円ですかね。高校生で五千円、多い子が一万円くらいじゃないですか。

―携帯の通信料は別なんですかね？それとも込みでしようか？

うちの場合はスマホ代込みで高校生は一万円にしましたね。その当時スマホが出たばかりで、一人六千円かかりました。ガラケーでしたら二千円弱でした。スマホを使う子と使わない子に平等にしたかったので、子どもに選ばせたいですね。スマホにするなら、小遣いは四千元ですし、そうでなければ八千円です。

―限られたお小遣いの中から自分の必要性やお金の価値を考えて選ぶことができたんですね。

そうですね。お姉ちゃんはみんなと同じようにスマホがほしかったけれど、結局ガラケーの一番安いプランにして毎月九千円の小遣いを手に入れ、余裕のある生活をしてました。息子は

四千円しかないけど、毎日友達と買い食いをして、月末はものすごくカツカツな生活をしてましたね(笑)。ほしいものも買えないし。

—小遣いで買う物に対しては、親から何か言うことはなかったんですか？

ないですね。そこは自分のお金だから、自分が管理して自由にさせてました。

—それは自己責任という事ですね。

ただ、小遣いで買う範囲、親が買う範囲は明確にした方がいいですね。例えば、洋服や学用品は親が買う、日々のお菓子や友達のプレゼント、漫画は子どもが買うとか。明確にしておかないとトラブルになりますからね。子どもが間違って買ったら損しちゃうし。逆もそうです。

—兄弟に比べてもね、すごい貯める子もいれば、もらった先から使っちゃう子もいるでしょうね。

うちの息子は使っちゃうタイプで、それは大学生になっても社会人になっても変わらない気がします。(笑)いつもカツカツで(笑)。ただ、学生の頃から投資をしたり、今は副業を始めたりにして、足りないなら稼げばいいという思考になりましたね。

—同じ環境で育っても全然違いますね。

そうですね。それが性格の違いなのか、男女差なのかはわかりませんが。

—でも自分でやりくりするのは、やっぱり小遣いから学ぶのはすごく大事ですね。

ほしい物を必要な時に親が買ってあげる人は、母の日のカーネーションはどうするんですか？うね？私は小遣いとは人によってプレゼントを買ったものでもあると思うんですけどね。

—そうですね。しかも自分の限りあるお小遣いの中からコツコツ貯めて買うかわりに意味があるんですよ。

お父さんと買いに行つて、カーネーション代をお父さんが出してたら、ありがたみがね。なかなかないんですよ。(笑)

「子どもによつたらお母さんのカーネーション買いに行くから、」お母さん、カーネーション代ちようだい」っていうかもしれないですね。(笑)本当にお小遣いって大事なんだなと思いますね。うちはまだあげてないんですけど、お金の価値をちよつとずつ覚えさせるためにも、小遣いを百円ずつとかでも毎月あげるようにしようかと思いましたね。

例えば、お菓子を買いに行くのにも「好きな物を入れなさい」というよりは百円、二百円を渡して、「この範囲で買いなさい」というのもいいですね。そうしたら親が「それは高いからやめなさい」とかフワーフワー言わないですみますもんね。

「そう思うと、遠足のお菓子代三百円っていうのもよくできたシステムと言えますね。」

「そうですね。必死で十円とかのお菓子探して、キウイチり二百円で納めようとして。」

「バナナは入るのか入らないかで揉めたりして(笑)。長時間舐められる飴ってというのが発売になった時は、同じ金額でこっちの飴の方が得だぞってみんな買ってましたね。みんな考えるんですよね。」の値段でこれが自分にとってどれだけのメリットがあるのか。

「お金を学ぶ第一歩として、お小遣いについて考えてみるっていうのもいいかもしれないですね。そして、子どもとお金と言えは進学費用ですね。それぞれの「家庭」によって用意できる金額は当然違います。どのように家計の状況を子どもと共有して進路先について考えていくのが一番いいのかなって思いますね。」

家庭の中で収入の話はあまりしないのではないのでしょうか。親の給料や食費、家賃やローンなどの話を子どもにしないことが多いですね。でも、それは話しておいた方がいいと思っています。やつつすねば、支出についても話すことが出来ますよね。例えば、外食は毎月一百万円の予算があるとしています。その中で今月は焼肉に一回食べに行くって終わりにするのとか、ファミレスとマクドナルドの二回に分けるのとか、一緒に考えようって言うのがいいと思います。

進学費用の話に戻りますが、子どもの人生がかかっているわけです。大学に行く必要がない、県外はダメ、私立がダメとか、子どもの選択に制限をつけることがあります。いろいろな言っても、結局は資金不足が理由なのもありですね。それを言わずに反対されても、子どもが納得できないと思います。ただ、うちはお金ないから進学できないではなくて、自分ができる範囲を明確にして、その中で一緒に考えようって言うのがいいと思います。

用意できる金額では足りないから進路先を変えるのか、奨学金を利用してでも行きたいのかと一緒に考えよう、との準備できるのかを伝えるのは、早ければ早いほどいいのかなと思いますね。例えば、あなたのために月々これだけ貯金してるよ、高校や大学に入るまで、「いくら貯まってるのよ」とか見通しを知らせておけば、それを元に早くから進路を考えよう

とができると思うのです。また、身分不相応な高い物を欲しがった時も、今は余裕がないからと断ることができますしね。

ー本当こそうですね。

だから、お金について考えることは人生について考えること、人生を計画するっていうことだから大事なかなと思います。

ー本当ですね。高校・大学進学に自分にどれだけお金がかかるか、これは結構な額になってきますよね。その大きな話をする前に子ども頃から小さなお小遣いの中でやりくりするトレーニングを積んでいくと、その時にスムーズにその話ができることに繋がるのかなと感じました。子どもの時に、ほしい物を買ってもらって、好きなことをしてきたのに、進路の時は好きな事させてくれないのってなりますよね。

こそうですね。今までお金のことなんて心配したことなくて、好きなものを食べて、おもちゃも買ってもらってきたのに、進路の時に急にお金がない、それはダメとなると子どもも戸惑うし、腹立れますよね。今まで頑張って与えてきた親御さんからしたら、なんでも子どもの思い通りにはできないと思うってしょうしね。

ーどうしてもお金の話は、親だけで済ませて子どもを交えてするのはないですね。うちは「貧乏だからそんなないよ」だけしか言うてなくて、それを他で「うちは貧乏なんだ」って言いながら、それも困ったもんだなと思うんですけど(笑)。もうちょっと具体的に話をすると子どもは分かるんですね。

もちろん年齢によりますが、分かります。限られた資源の中で何をどう分配していくかというのは、価値観の問題にもなりますよね。車に使用したいのか、食事に使いたいのか、レジャーに使用したいのか、教育費に使いたいのか。

ー歴史的に見ても日本の社会では、子どもがお金のことを口出さない、親がちゃんとするものだっていう、多分国民性の部分もあると思うんですね。冒頭で海外ではもってお金の話を親子でしますよっていうことをおっしゃってましたけど。

こそうですね。日本よりもっとシビマで、十八歳までしか親は子どもの責任を持たないという考え方をしているところもあるんですね。だからそれ以降は進学したければ、子どもが教育ローンを組んだり、給付型の奨学金をもらって大学は行くものだと考えるわけです。でも、日本人は大学卒業まで金銭的にも子どもの面倒を見るもんだという考えが大きいですよ。十八にな

つたら家を出て自立するということ考えがあるので、子ども頃から自分で稼ぐ機会を与えますよね。以前話したベビーシッターや新聞配達なんかです。自分で稼ぐことを小さい頃からするし、学校でもお金の増やし方を学びますしね。

— そうなんです。トリーくんだとお小遣いを与えることはお金の価値を理解することにつながりますけど、それは言ってもお小遣いも親からも与っているのであって、労働の対価ではないですね。働いてお金を得ることを学ぶには、アルバイトが学校で許可されているかにもよりますが、まず小学生から小遣いで何が買えるかっていうところから始めて、それがどうやってお金で稼げるかができるのかということに繋がっていくべきです。トリーくんになっっていくですね。

お小遣いのあげ方で、議論になることの「お小遣いをした時に報酬としてお金をあげるかどうか」というのがありますね。お小遣いを労働と考えるかですね。例えば、風呂掃除一回したら五十円とか。労働に対する対価を与えることは、お金を稼ぐことを教えるという意味で、一見メリットがありそうですが、デメリットもあるわけです。そういう日常的な家事にお金を絡めてしてしまうと、何か頼んだ時に「それ、いくら？」って子どもが聞くようになってしまいますね。そうすると自分にその報酬が必要なければやらないわけです。家庭の細々とした仕事である家事は、家族みんなで分担するもので、ルーチンとするものですよね。家族の一員として役に立つといった感覚が大事なのに、子どもだけお金をもらうからやるといふのは違う気がしますよね。ただ、例えば洗車や窓拭きなど特別な仕事は、お金を特別にあげてもいいかもしれませんね。

— 日常的なものって、年に数回しかないようなものじゃないですか。

— そうですね。親もどのタイミングに子どもに小遣いを与えるのが効果的なのかを考えながら、お金について子どもにも伝えていくいい機会になるかもしれませんね。

— そうですね。一人でやっていると時にそれができないと大変なトラブルがありますから、それは教育の中でもすごく大事な部分じゃないかなと思いますね。

— そうですね。失敗は小さい頃にしたい方がいいですよ。有り金全部持って行って、一度に全部使っちゃって、その後お金がなくなると困るとかね。

— 人尊重い話ですね。

— あれも欲しいし、これも欲しいってなっちゃって駄目ですね。

例えば誰かに貸しちゃって返ってこないとか、つい友達に奢ってあげて自分の小遣いがなくなっちゃったとか。でも、そういう失敗は小さい頃にしていた方が何百円で済むじゃないですか。「次からこうしようね」って話ができるけど、大人になってからすると万単位になったり、生活に支障が出たりするので、小さいうちに失敗させるために小遣いをやるっていう考えもありますよね。

ーお金のトラブルは人同士の信頼関係を壊してしまいますもんね。それだけ大事なものですからね。

ーでは、お金についてー回家族で話し合ったり、子どもにはどういう形でお金を与えるのが一番効果的かを親も勉強しながら考えるのもいいかもしれませんね。今日は鈴木先生、ありがとうございました。

ありがとうございました。